

## 欲望の制御と普遍性／多元性

萩原 優騎 \*

### はじめに

現代は、科学技術の影響力が、かつてないほど大きくなった時代であると言われる。特に先進国において、人々の日常生活は、科学技術なしには成立しがたい状況にある。そこには、プラスの面とマイナスの面が存在する。科学技術の恩恵により、快適で便利な生活を享受してきたことは、多くの人々が認めるところであろう。その反面、科学技術によってもたらされる危機も、確かに存在する。2011年3月に日本を襲った大地震では、原子力発電所の事故が社会を混乱に陥れた。原子力発電という、これまで人々の日常生活を支えてきた科学技術が、まさに危機の源泉になった。もちろん、この技術の危険性については、これまでも深刻な問題として認識され、議論の対象となってきた。しかし、事故の発生に伴い、その危険性を日常生活の中で人々が実感することで、改めて問われることとなった。そこでは、電力不足という問題が主要な論点の一つとなった。これまで通りの生活を維持するには、新たな発電施設の開発や節電が必要であるとされた。一方で、従来の生活の在り方そのものを見直すべきであるという問題提起もなされている。その主張では、現代社会に生きる人々の欲望とその制御ということが、問いの対象となった。

現代社会における「欲望」という問題は、決して新しいものではない。<sup>(1)</sup>しかし、その具体的な解決について、社会的合意が得られているとは言えない。一方、これまでに提起されてきた論点の中には、今日の事態に直面して、改めて問われる意義のあるものが少なからず含まれている。本稿では、社会学や倫理学において論じられてきたことの一部を、このような文脈において関連付けて考えてみることを課題とする。最初に、欲望の問題を近代化の一側面として位置づけている、村上陽一郎の考察を見る。村上は、近代文明の進展において人々の欲望の解放が徹底されたと論じている。

\* 本学社会科学研究所研究員、本学教養学部非常勤講師

また、その背景に、科学技術の進歩に伴う人々の生活条件の変化があったことが確認される。次に、現代日本社会の構造を考える上で根本的な事柄として欲望の問題を提示した、梶田孝道の「受益圏・受苦圏」理論を扱う。この理論では、社会問題の解決のためには、制度的、技術的な対応だけでなく、人々の欲望や認識の問題も含めて問う必要があることが提起されている。続いて、梶田の問題意識に近いと思われる理論的枠組みとして、鬼頭秀一の「社会的リンク論」を挙げる。この理論では、各々の問題の個別性を分析する必要性や、分析を通じて欲望の問題をどのように捉えればよいのかということが議論の焦点となっている。最後に、以上の三つの視点の考察を通じて、何が見えてくるのかということ述べる。

## Ⅰ. 欲望の解放

### 1. 聖俗革命と近代文明

近代は、科学技術が著しく発達した時代である。より正確に言えば、今日の我々が享受している科学技術は、まさに近代化の産物にはかならない。この点について、村上陽一郎は科学史の観点から記述している。村上によると、ヨーロッパの近代化において、啓蒙主義の興隆が重要な意味を持つ。啓蒙主義は、それまでのキリスト教信仰を中心とした秩序を批判し、世俗化を推し進める役割を担った。村上は、この過程を「聖俗革命」と呼ぶ。それは、近代のどの時期や分野にも、その切り口に聖から俗への移行を確認できるということを指す。<sup>(2)</sup>つまり、この移行は、特定の時期を境として一挙に実現したものではない。ここでは詳述できないが、例えばヨーロッパの各地域を比較してみれば明らかなように、近代化が進行したとされる時期は異なる。また、それぞれの地域の内部でも、社会制度や思想が全く同時に世俗化していったとは限らない。それにもかかわらず、啓蒙主義を経たヨーロッパでは、宗教信仰を基盤とした制度や知識体系は、従来のように社会の中心的な位置から退いていった。その影響は現在も色濃く残っているとしても、近代化が進む過程では、世俗的な秩序や価値が勢力を強めていった。<sup>(3)</sup>

聖から俗への移行は、この世界の秩序が神の支配という確固たる前提を喪失したことを意味する。啓蒙主義は、人間という存在を高く評価し、宗教を「迷蒙」と見なした。神に代わって世界の頂点に君臨した人間の生活様式を、村上は近代文明と呼ぶ。そして、これこそが、《civilization》という言葉が近代において誕生した背景にあると考えられる。「『文明』という概念は、啓蒙主義のイデオロギーに裏付けられたものである。

神から自立し、神を棚上げし、人間の悟性のみを頼りに、すべての世界構造を再編成しようとするとき、それを達成していない状態は『非文明』であると定義された。『自然』を『自然』のままに放置しておくことは、『野蛮』なことであって、『文明人』の資格に欠けることになる。野蛮な『自然』を『人為』によって矯正することが、『シヴィライズ』であり、それを達成した状態が『シヴィライゼーション』と考えられた。<sup>(4)</sup> こうして、自然の徹底的な人為化が図られることになる。今日の地球規模の環境危機につながる諸問題が、近代文明が進展していく過程で生じてきたことも、決して偶然ではない。<sup>(5)</sup>

近代文明による人為化の徹底が試みられたのは、自然環境だけではなかった。人間自身もまた、そのまま放置しておくことは適切ではないとされた。『人間』が脱却しきれない『自然』、『人間』の内なる『自然』、『人間』のなかに住まう『自然』、それはしばしば『第二の自然』と呼ばれたが、それは言い換えれば『動物としての人間』、『生物としての人間』であった。<sup>(6)</sup> そのような存在としての人間の統御の方法として、近代の倫理学が展開されたという。しかし一方で、動物は人間のように過剰な殺戮、楽しみのためだけの食事や生殖活動などを行うようなことはない、村上是指摘する。「こうしてみると、『人間』の食欲、性欲、征服欲などは、一向に『動物的』ではないではないか。むしろそれらは『第二の自然』どころか、『人間』そのものではないか。一八世紀の『文明』の概念はそれを見落としていたとも言える。というのも、『文明』のイデオロギーは、欲望の持つそうした『人間』的な部分に関しては、むしろその解放を目指したからである。『人間的』な欲望を抑圧してきた宗教を憎んで、その抑圧から人間を解放することもまた『文明』の一つの使命だと考えたからである」。<sup>(7)</sup>

## 2. 技術の発達

このような欲望の解放という傾向は、思想によってのみ推し進められたわけではない。そこには、近代社会の様々な要素が関係している。それゆえ、制度や技術などが、近代化に伴ってどのように変化してきたのかということに、目を向けてみたい。近代以前の社会では、技術はそれぞれの地域に密着したものとして存在していた。それは、「技術の可視性」と表現される。人々は、自身の生活を支える様々な技術の成果が、どのようにして自らの手にあり得るのかということ、十分に認識できた。<sup>(8)</sup> この性質は、人々の生活条件にも一定の影響を及ぼしていた。すなわち、人々が生活する上で必要とする技術との関係は、「技術の可視性によって、非常にわかり易い形で保証

されていたのではあるが、その『必要性』という概念に関しては、逆に生活空間の方が、その範囲をほとんど一方的に規定していた、という事実を忘れるわけにはいかないのである」。(9)

種々の制約条件ゆえに、人々の欲望が解放される契機が乏しい状況では、技術の絶えざる進歩も望まれない。しかし、近代化が進むにつれて、科学や技術は急速な発展を遂げていく。長年にわたってほとんど変化しないような伝統的な技術を支えてきた、それまでの閉鎖的な技術者共同体での営みとは異なる状況が、ここに生まれた。技術は国家や研究機関の管理下で、より開かれた形での研究及び開発がなされるものとなる。(10) このようにして、近代技術が誕生する。「文明のイデオロギーを実践していくために、人間の手に用意されている道具、それが技術である、という形で、技術を定義し直すことが、一八世紀以降の西欧世界の『文明』のなかで遂行された。技術は文明の理念の実現と直接結びつく形で新たな規定を受け、新たな役割を与えられることになった」。(11) ここでは、従来の技術との関係も問い直される。すなわち、「生活空間そのものが、人間の望みや希求の限界を設定してきた過去の状態を否定し、生活者個人に対して、原理的な自由を保障することを標榜した」。(12)

これは、伝統に対する評価の変化であると表現してもよい。従来の伝統的な技術やそれとの関係が否定されたのは、「伝統や習俗と呼ばれる規範、生活者の合意なしに、ただ社会のなかで因習的に認められてきた様々な規範に、生活者が無批判に従うことを否定したからである。そうした規範の一つ一つを洗い直し、合理的な根拠がないと判断されたときには、躊躇なくそれを捨て去ることを推奨したからである」。(13) この点については、アンソニー・ギデンズが、近代化の特徴として述べていることに重なる。近代においては、認識や制度の自己言及性が増大した。その結果、かつて伝統が社会に対して持っていたような統制力は、衰退することとなった。「なぜなら、正統と認められている伝統は、見せかけの衣をまとった伝統であって、その存在証明を近代の有する再帰性からのみ得ているからである。近代の社会生活の有する再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味され、改善され、その結果、その営み自体の特性を変えていくという事実に見いだすことができる」。(14)

技術の発達による社会の変化は、情報という観点から捉えることもできる。村上は、そこに「大衆」の出現を見る。例えば「放送」という概念は、聴取者の個別性や特性を一切捨象した、不特定多数の抽象的かつ「のっぺらぼう」な、「大衆」という存在

を前提として成立する。<sup>(15)</sup> 情報技術の飛躍的な発展は、大衆による大量生産・消費・廃棄型社会の進行を後押しした。技術の大規模化や標準化、資本主義の進展などによって可能になった、このような生活空間では、人々は欲望の赴くままに物を購入し、消費する。「やがて、『需要』は、生活者の間に存在するものではなくなり、生活者の間に潜在的に眠っているものになった。したがって、供給する側が、宣伝、広告などあらゆる手段を使って、その眠りを覚まさせることもまた、正当視されるようになった。今日では、さらに本来的には生活者のなかに、存在してもいないし、眠ってもいないような、つまり無の需要状態のなかにさえ、供給する側が無理矢理に需要をつくり出すことさえ、不当とは見なされなくなった」。<sup>(16)</sup> こうして、次々に欲望が解放され、開発されていく。

## II. 社会学の観点から

### 1. 「受益圏・受苦圏」理論

近代化に伴う欲望の開発と表裏一体に進行した大量生産・消費・廃棄型社会は、各地で深刻な環境問題を引き起こした。日本においては、戦後の高度経済成長の時期以降、多くの公害が発生した。そうした中で、新幹線公害への取り組みから、「受益圏・受苦圏」理論が生まれることとなった。この理論もまた、近代の技術、制度、価値とそれら相互の関係がもたらした大量生産・消費・廃棄型の生活様式とそこでの欲望の問題を、議論の中心に置いている。梶田孝道によると、公害が頻出した状況は、大規模開発によって生まれた。「それらに共通するのは、広範囲な社会システムの要請から発せられた形で、特定の局地的地域に社会的意味をおびた巨大な資本の投下がなされ、その結果、一部の地域に大きな構造的緊張を生んでいるという点である。つまり、開発にともなって広範囲にわたる国民が希薄化された利益を享受する一方で、一部の地域住民には致命的ともいえる犠牲が及んでいるのである」。<sup>(17)</sup>

このような対立図式を、梶田は多角的に分析していく。一つは、テクノクラートと生活者の対立である。「テクノクラートは、諸々の利害の全体の考量と調整を自己の課題とし、それゆえ政策の『体系的整合性』の必要性を強調し、すべての利害・要求を『部分的』なもののみなし、これらを『全体的』文脈のなかで相対化する」。<sup>(18)</sup> こうした視点は、生活者とは相容れないという。「被害者住民たちは、自己自身が直接的・具体的に感受する切実な利害・要求を行動の原点におき、それゆえ自己のかけがえのない要求の正当性を主張し、その実現にむかって努力する」。<sup>(19)</sup> すると、両者は前提

とする視点が異なるので、その違いゆえに様々な摩擦が生じる。それどころか、それぞれの視点が固定化されてしまっているために、両者の間にある溝は、個々人の主体的な意識的努力によって簡単に乗り越えることはできなくなっているという。<sup>(20)</sup>

この溝が生じる背景を説明するために、「受益圏」と「受苦圏」という概念が用いられる。梶田の定義によれば、「受益圏」は、開発によって利益を被る人々を指すものであり、「受苦圏」は、開発によって致命的な被害が及ぶ人々である。<sup>(21)</sup> 大規模開発とそれに伴って生じる各種の公害は、この二つの圏域の関係から生じる問題として捉えられている。テクノクラートによる大規模開発によって、受益圏の安定した生活が保障され、一方でその犠牲となる受苦圏の人々とテクノクラートとの摩擦が生じる。受益圏は希薄化しつつ全国規模に拡大しているが、同時に、受苦圏が局地的に生み出されている。<sup>(22)</sup> このような状況に、過密化と過疎化が重なる。その一例として、梶田は原子力発電所を挙げている。そして、それは民主主義の在り方をも問うものであるとされる。「今日、原子力発電所、核燃料サイクル基地、NLP（夜間発着訓練）基地等の『迷惑』施設が、開発の波がとどかない過疎地を求めてさまようと同時に、国際化と情報化の中心である『世界都市』東京に、とりわけ東京湾に、新たな開発計画が集中している。過密と過疎、受益と受苦が交錯する日本列島は、従来の民主主義が前提とした条件を根底から変えてしまったのである。一票がもつ価値という点での格差の問題、原子力発電所建設をめぐる意志決定の問題、これらはいずれも、民主主義の根幹にかかわる今日的な問題である」。<sup>(23)</sup>

こうして、「受益圏と受苦圏」という図式が地域間で成り立つようになると、当事者たちに関わる問題をめぐる対立の様相も変化する。受益圏と受苦圏が重なり合った利害関係の中で生じる紛争を、「重なり型紛争」と梶田は呼ぶ。<sup>(24)</sup> 従来の紛争は、このタイプのものが多かったという。各地域間の相互依存性が低く、各々の生活圏や経済圏が自己完結性を保持していたため、受益圏と受苦圏はほぼ重なりあい、そこでの紛争は一定の領域内で解決が期待される場合が多かった。<sup>(25)</sup> その例として、ある自治体内におけるゴミ処理工場とそれによる汚染を、梶田は挙げている。こういった問題では、住民間の空間的・社会的距離はそれほどなく、一人一人に責任の自覚が生まれやすいため、紛争解決の可能性が相対的に大きいという。<sup>(26)</sup> それに対し、受益圏と受苦圏が重なり合わない場合があり、それは「分離型紛争」と呼ばれる。この場合、希薄化した全国規模の受益圏と、局所化された受苦圏という先に見た図式が現れる。ここでは、人々の間での共通の理解が得られにくく、受益圏と受苦圏の空間的・社会的

距離も大きいため、犠牲を強いることへの無感覚・無責任が生まれやすい。<sup>(27)</sup>

## 2. 社会構造の変革

受益圏と受苦圏をめぐる諸問題の解決に向けて、梶田は三つの解決策を提示する。第一に、補償である。「これは、開発事業によって生じた（生じるであろう）住民等の損失を金銭等の方法でつぐなうものである。補償（受益）の総計が受苦の総計よりも大きく、かつ受苦が互換性をもつ、つまり補償可能である場合には、この補償という手段によって問題は解決する」。<sup>(28)</sup> 第二に、外部不経済の極小化である。「これは、開発事業によって生じるであろう外部不経済それ自体を事前に回避し、そのために費用を投じることである。いいかえれば、所与の社会的需要を前提としたうえで、受苦圏の発生を最小限に抑えるような方策を摸索するわけである」。<sup>(29)</sup> 梶田によれば、この試みにおいては、技術上の制約を考慮する必要があるという。つまり、新たな技術の開発によって、問題のある程度の解決が可能となることがある。「しかし、現実には、問題解決の困難さは技術上の制約にあるというよりは、テクノクラートにとってのコスト最小化の要請にあるというべきであろう。この要請にもとづく開発の骨格の決定は、受苦圏の発生を最小化しようという論理としばしば衝突する」。<sup>(30)</sup>

第三に、欲求の制御である。「受苦圏の形成を防止する、より根本的な解決策としては、社会的需要それ自体を減少させる、あるいは少なくともこれ以上増やさないことが考えられる」。<sup>(31)</sup> これにより、受益圏と受苦圏の対立が生まれる背景にある、日常生活そのものを改めるということである。「もちろん『欲求の制御』といっても、モラリスティックな規範や禁欲が念頭におかれるべきではない。そうではなく、社会的需要を生み出してくる社会構造、産業構造を変え、国民の価値観、生活様式を変えることが必要なのである。もう少しわかりやすくいえば、平均人が、過度の禁欲を自らに課すことなしに平均的生活を営み、なおかつそれによって随伴的に受苦が発生しないようなシステムを創り出すことが必要なのである」。<sup>(32)</sup> ここで述べられていることは、村上が指摘していた、人々の需要が発掘され、さらには開発されるという社会状況に対する、一つの取り組みとして理解できるだろう。

その取り組みについて、梶田は受益圏と受苦圏の関係という枠組みで構想している。先に見たように、受益圏・受苦圏の空間的・社会的距離が大きくなった状況下では、犠牲となる人々に対する無感覚・無責任という傾向が強まる。これは、「分離型紛争」に相当する。「この種の開発は『受苦忘却』型であるといえる。それは、受苦が回収

されないまま放置されるという意味では『受苦放置』型であるともいえる」。<sup>(33)</sup> 一方、「重なり型紛争」の場合には、受益圏と受苦圏が重なり合うため、共通了解や一定の解決が比較的容易であるとされる。「この種の開発は『受苦覚醒』型であるといえる。また当然のことながら、受苦回避ないし受苦補償の努力がはらわれやすく、それは同時に『受苦回避』型にもつながりやすい」。<sup>(34)</sup> こうして、「受苦忘却」型から「受苦覚醒」型へ、「受苦放置」型から「受苦回収」型への変革が求められる。なお、「『受苦放置』的であるか『受苦回収』的であるかについては、社会的費用論や受益者負担論の文脈で部分的には議論されている。しかし、それだけではなく、日常生活の知覚的レベルにおいて『受苦忘却』的であるか『受苦覚醒』的であるかという点での相違が、問題解決のうえで大きな意味をもっている点を、是非とも強調しておきたい」。<sup>(35)</sup> このように、梶田の場合も、技術、制度、価値とそれらの関係という、複数の側面からの問題解決が図られている。

### Ⅲ. 倫理学の観点から

#### 1. 社会的リンク論

日常生活における制度、技術、価値との関連で欲望の問題を多角的に分析する視点を、梶田は提示した。同様の問題を、倫理学の観点から論じているのが、鬼頭秀一である。鬼頭は、従来の環境倫理学の多くには、全体主義的な傾向があったことを指摘する。そして、そうした議論の前提になっていることを批判する。「地球全体のために抑制されようとしているのは、人間の欲望や自由であるということである。それには、放っておいたら人間の欲望が無制限に極大化するという前提があり、その上で、何らかの倫理的あるいは法的手段で制限したり、人間の自由は拡大すべきか制限すべきかという議論がなされている。この議論は、古典的とも言える、西欧の近代主義的な人間観を前提としている。この議論を、近代化、工業化の一途を辿っているにしても、必ずしも西欧の近代主義的な考え方が社会全体として了解されていないような非西欧諸国にそのまま当てはめられるのかどうかは大いに問題がある」。<sup>(36)</sup> その典型は、人口問題であるという。「社会経済的要因を無視して、人間の欲望の増大の必然的流れとして、放っておいたら人口は増加する傾向があることを前提として議論するのは非常に危ういことはしばしば指摘されている。とくに南の国での人口の爆発には、社会経済的要因が深く絡んでおり、それを単に人間の欲望などの自然的な傾向に還元できないことはよく知られている。そもそも、人間の欲望というものは、一定の社会的

な枠組みの中で初めて意味を持つ概念であって、それを前提にしてそれを認めるか、制限すべきかという議論をするのはあまりにも単純すぎる議論であろう」。(37)

このように、鬼頭の考察においても、欲望の問題はそれ自体として論じられるべきものではないとされる。それぞれの地域の個別的状况に目を向ける時、その視点と従来の環境倫理学の違いが見えてくる。「徳目としての環境倫理はそれ自体の存立のあり方から普遍性を標榜している。環境への配慮のあり方の指針は、国や民族、地域、そして個人を超えて普遍的なものでなければ利害や文化を超えた合意形成は難しいからである。しかし一方で、多元性を無視して一律の政策を半ば強制に基づく形でグローバルに適用しようとすることは、環境ファシズムに陥る危険性はある」。(38) そうした問題点を克服し、地域の多元性を考慮に入れた理論的枠組みとして、「社会的リンク論」が提唱される。「社会的リンク論は、人間と自然との関係のあり方を、人間と自然を二分法で分けてその関係を見るのではなく、その両者の関係性のあり方を分析しようとする理論的枠組みである」。(39) 人間と自然を対立させた図式では、それぞれの地域において、両者がどのような関係にあるのかということが見えにくい。そうした点を明示することのできる理論的枠組みにおいて、地域社会を構成する諸側面とそれらの関係性を分析するのである。

社会的リンク論は、二つのリンクの関係性に注目する。「人間が、社会的・経済的リンクと文化的・宗教的リンクのネットワークの中で、総体としての自然とかかわりつつ、その両者が不可分な人間－自然系の中で、生業を営み、生活を行っている一種の理念型を、『かかわりの全体性』と呼び、『生身』の自然との関係のあり方として定義する。それに対して、その社会的・経済的リンクと文化的・宗教的リンクによるネットワークが切断され、自然から一見独立的に想定される人間が、人間から切り離されて認識された『自然』との間で部分的な関係を取り結ぶあり方を、『かかわりの部分性』と称し、『切り身』の自然との関係のあり方として定義したい」。(40) 概して近代化が進行する状況では、「生身」から「切り身」への移行が生じる。その象徴として鬼頭が挙げているのは、スーパーマーケットで売られている肉である。動物の誕生から、店でパック詰めされるまでの過程に存在しているはずの、様々な社会的・経済的なつながりを捨象した形で、その肉片は「切り身」として食卓に並ぶ。(41) そして、ここでは二つのリンクの関係は、問われないままとなる。

## 2. リンクの回復

ただし、ここで言う「生身」や「切り身」は、当該地域の状況を分析するための理念型であり、社会的リンク論の狙いは、特定の制度や価値を普遍主義的に一律に適用することとは異なる。「この分析ツールの重要な論点は、関係性を実体としてとらえ、伝統社会のあり方など、二つのリンクの関係が不可分にあるあり方をそのまま普遍的な規範的価値として提起するのではない。その関係を二つのリンク概念で分析し、実体ではなく、システムとして、関係性のネットワークのあり方に関して普遍的な規範的価値を提起しようとするものである」。(42) 確かに「生身」の関係は、近代化を遂げる以前の伝統社会に観察できる場合が多い。しかし、そのことを認めるとしても、伝統社会を実現すべき理想として掲げる復古主義以外の選択肢もあり得る。社会的リンク論では、伝統社会は、「生身」の関係を実現していた一つの事例として位置づけられる。「現在、『切り身』のかかわりにあるわたしたちの生活を、その伝統社会や先住民の生活に移行することを想定しているわけではない。また、あるいは、現在そのような形で暮らしている人たちのあり方を今後も固定化することが、倫理的にいいことであるということを手を主張しようとするわけではない」(43)。

こうして、普遍主義的な環境倫理学を批判することは、多元主義を無批判に受け入れるわけではないという論点に行き着く。多元主義的な立場から、現状をそのまま肯定する立場を、鬼頭は「文化相対主義的な立場からの多元主義の陥穽」としての「決定論」と表現する。「それは、伝統的な、安定的な人間－自然関係のあり方を固定化してしまう危険性である。地域の人たちが近代化の波の中で変わりたいと思い実際に生活を変化させていくことの可能性に対して、否定的になり、外から制限を加えることになる」。(44) そのような多元主義は、「静的な多元主義」と呼ばれる。「静的な多元主義ではなく、時間軸にかかわるものをそこに取り込み、文化をもっと動的に捉えていく『動的文化論』を展開していく必要がある。前に述べた社会的リンク論は、動的視点に基づいた形で理解しなければならない。実体としてではなく、ネットワークとしての『不可分性』という規範は、静的な実体主義を超えていくことを意味しており、これは、メタのレベルでの普遍的な理念の提唱を意味している」。(45) つまり、それぞれの地域社会が近代化の中で変化していくことを、この理論は否定するものではない。その変化の中で、リンクの関係性がどのようになっているかということ进行分析するのである。

したがって、静的な多元主義を拒絶するということは、多元性を放棄することでは

なく、鬼頭が批判した通常の普遍主義を採用することでもない。「実体としてそのもののレベルとしての普遍性はローカルに依拠した多元主義と対立するが、ローカリティをそのまま認めながらのメタのレベルでの普遍性を追求することは可能である」。(46) このメタのレベルでの普遍性とは、リンクの不可分性である。それを、地域や時代を超えて適用可能な、メタのレベルに位置づけることで、普遍主義と静的な多元主義の双方を克服することが可能になる。すなわち、それぞれの社会の多元性を尊重しつつ、同時に、現状を問い直しながら意思決定過程を構築できるようになる。その際に社会的リンク論は、参加者が合意形成するために用いる、解を一義的に示さない「参照枠」として機能する。(47) 解を一義的に示さないというのは、それぞれの社会において、リンクの不可分性という共通目標を実現する方法や過程は、様々であり得るということである。

このように参照枠としての社会的リンク論の観点から、欲望の問題も捉えなおすことができる。鬼頭の構想では、欲望の問題は、それ自体として論じられるべきものではない。人々が持つ欲望は、当人が生きる地域社会の制度、技術、価値、そしてそれらの関係性から成る。それがどのようなものであるのかということの分析が、この理論によって可能となる。その上で、リンクの不可分性というメタのレベルでの普遍性が、問題解決の手がかりとして提示される。「二つのリンクが不可分であることは、私たちの自然との経済的、社会的関係にかかわる行為において、精神的、宗教的、文化的価値をそこに想定し、倫理的行為へと方向づけ、近代的な欲望に制限をかけ、環境持続性を保証する可能性を持つ」。(48) そして、このように欲望の問題に取り組むということは、梶田と同様に鬼頭においても、現状の在り方を変革する試みとなっている。「そもそも、環境問題の原因を考えた時に、現代の浪費的な大量生産・消費・廃棄の経済社会システムの克服こそが重要な課題として考えられなければならない」。(49)

## おわりに

以上において、村上、梶田、鬼頭の議論をそれぞれ見てきた。これらの関係を、どのように捉えればよいのかということ、最後に扱いたい。村上が述べていたように、西欧で近代化が進む過程では、聖俗革命を経ることで、人々の欲望の解放が進んだ。そして、技術や制度が欲望の解放とさらなる開発を促した。こうして成立した近代文明は、今や世界中に拡散しつつある。その過程を、ギデنزは「グローバル化」と呼ぶ。「グローバル化とは、さまざまな社会的状況や地域間の結びつきの様式が、地球

全体に網の目状に張りめぐらされるほどに拡張していく過程を、基本的に指している。したがって、グローバル化とは、ある場所で生ずる事象が、はるか遠く離れたところで生じた事件によって方向づけられたり、逆に、ある場所で生じた事件がはるか遠く離れたところで生ずる事象を方向づけていくというかたちで、遠く隔たった地域を相互に結びつけていく、そうした世界規模の社会関係が強まっていくこと、と定義づけできる」。(50)

この相互関係が生じる過程を、村上は普遍主義と多元主義をめぐる問題として捉えている。西欧の近代文明は、自身の文化の在り方を、他の地域へと普遍化することを試みてきた。そして、鬼頭が論じるように、多元主義の主張は通常、普遍主義への抵抗という側面が強い。ただし、「個別の文化のアイデンティティは、むしろ『文明』の持つ力学的作用によって、初めて確立されることが多い。個々の文化の独自性の自覚に基づく個別性尊重の要求は、文明のブル・ドーザ効果と文明に被支配を要求される文化との相互作用のなかで育っていくものである。言い換えれば、個々の文化の等価なることを主張する多元主義は、ほとんど文明の必然的な副産物と考えてよいのである」。(51) それゆえ、多元主義の主張や、近代文明の普遍化の結果として生じる欲望の問題は、このようなグローバルな文脈に位置づけられなければならない。それぞれの問題が生じる地域社会は、グローバル化という状況下に置かれているのである。梶田は、「受益圏・受苦圏」理論を、こうした文脈でも論じている。受益と受苦の連関が国家の枠を超えて拡大する場合、問題の認知や解決が、極めて困難になるという。(52) 情報技術やネットワークが発達したとしても、問題の認知度がそれに比例して高まるとは限らず、解決が必ずしも容易になるとも言えない。

近代的な欲望は、動物的であるどころか、まさに人間的であると、既に引用した箇所でも村上は述べていた。「『文明』が宗教から人間を解放したのだとすれば、逆に、人間を、その最も『人間』的なものから解放してくれるのは何なのかを、考えなくてはならない」。(53) 近代以前の宗教的な制約からある程度は自由になったことが、西欧における欲望の解放をもたらした。「超自然的なものの意志を『自然』のなかに認めることによって、『人間』は『人間的』なるものの解放に、限界を設け得たのだった。その仕掛けを否定してなお、人間は『人間的』なるものに限界を設定できるだろうか。言い換えれば人間は理性と悟性の働きだけで、宗教に代わるような働きを持つ新しい『倫理学』を構築できるだろうか」。(54) この問いに対する一つの回答が、社会的リンク論だろう。近代的な欲望の問題への取り組みの可能性として、鬼頭は「切り身」のリ

リンクを「生身」のリンクへと組みかえることを提唱した。そのために、参照枠としての社会的リンク論が有効であり得るとされた。普遍主義と静的な多元主義の双方を克服する、新しい倫理学の可能性が示唆されている。

ただし、これを用いた動的な意思決定を実現するには、参加する当事者たちの認識をも問題にしなければならない。「われわれが制御すべき当面の相手が、実際にわれわれの生存を脅かしているものが、われわれの解放された欲望の生産物であることを、十分設実に納得したときに、われわれは、賢明に行動することができるのではなかろうか」。<sup>(55)</sup> 冒頭で述べた、原子力発電所の問題は、その契機となり得るだろうか。この問題が、まるで一時的なブームのように語られる状況での意思決定は、それとは程遠い。むしろ、欲望について、その文脈や諸側面の批判的な検討を欠き、事態の根本的な変革の可能性を排除しているのではないか。このような状況を変えていく可能性を、梶田は論じる。「社会学とは、当事者たちの認識や意味付与を、彼らが参加している社会関係へとひきもどすことによって説明し直し、それによって当事者の直接的で即時的な意味付与を相対化する」ものであり、「社会学者が単なる『現実』の観察者にとどまることをやめ、当事者ととも、だかしかし当事者の視点とはあくまでも距離を保ちながら『現実』に参加することが重要である」。<sup>(56)</sup> 意思決定の参照枠という理論構想と、これを用いて研究者が意思決定の現場に関わることの一つの意義は、この点にあると言えよう。

## 注

- (1) 本稿で言う「欲望」は、「欲しいと思うこと」という、日常で一般的に使われている意味である。例えば精神分析では、この言葉に特殊な定義を与えている。そして、そこにおいて論じられている事柄は、本稿の主題とも無関係ではない。しかし、限られた紙数で論点を集約するために、そうした問題には立ち入らない。
- (2) 村上 (1976)、p.11.
- (3) このように主張することは、聖と俗が全く交わらないまま併存しているということには等しくない。むしろ、両者が影響し合い、相互に浸透していく中で、近代化は進行した。この特徴は、後述するヨーロッパ以外の近代化にも当てはまる。
- (4) 村上 (1998)、p.31.
- (5) もちろん、近代以前の時代に環境破壊が存在しなかったわけではない。また、それ以前の時代の産物が、近代以降に何の影響ももたらしていないということでもない。そうした点を認めた上でも、近代化が急激に進行していく過程において、各地に深刻な環境破壊が生じたことは確かであろう。
- (6) 同上、p.46.
- (7) 同上、p.52.
- (8) 村上 (2001)、p.115.
- (9) 同上
- (10) ここでは詳述できないが、村上は以下の点を挙げている (同上、pp.118-119.)。第一に、伝統的な技術者共同体である親方一徒弟制度は、職業選択の自由に反するという判断が、次第に大きくなったことである。第二に、国民国家の形成に伴い、国家の運営に必要な技術を教育する機関が整備された。第三に、この時期に産業革命が進行し、新しい工夫やブレイクスルーが数多く見られるようになった。
- (11) 同上、p.121.
- (12) 同上
- (13) 同上、pp.121-122.
- (14) Giddens, p.38. (邦訳 p.55.) このことは、近代以前の社会に再帰性がなかったということには等しくない。伝統的文化では、過去は尊敬の対象とされていたのであり、再帰性は伝統の再解釈と明確化にほぼ限定されていた (*Ibid.*, pp.37-38. [邦訳 pp.54-55.])。
- (15) 村上 (2001)、p.127.
- (16) 同上、p.131.
- (17) 梶田、p.3.
- (18) 同上、p.4. テクノクラートを、このような機能に限定して論じることについて、梶田は次のように記している。「この仮定と現実の間には一定の距離があることも事実であるし、場合によっては、テクノクラートはむしろ一部大企業の私的利害を代弁しているにすぎない、という批判がよせられることも当然予想されよう。しかし、本章は、こうした次元での議論ではない点を、あらかじめ断っておきたい」(同上、pp.5-6.)。
- (19) 同上、pp.4-5.
- (20) 同上、p.7.
- (21) 同上、p.v.

- (22) 同上 この理論が現在の日本社会にもそのまま当てはまるのかという点については、社会学者たちの間での議論がある。しかし、本稿では、梶田が欲望をめぐる問題をどのように位置づけているのかという点に注目して、この理論を取り上げている。そのため、上記の議論については、ここでは扱わない。
- (23) 同上
- (24) 同上、p.13.
- (25) 同上
- (26) 同上、p.14.
- (27) 同上、p.15.
- (28) 同上、pp.50-51. ただし、これが正当なものとなるためには、いくつかの問題が存在するという。「第一に、テクノクラート側の私利私欲は、補償のためのコスト負担を最小限に切りつめようとする。第二に、受苦圏に属する人々の意志が計画決定、補償内容・補償額の検討にどこまで反映しているかという問題が残る、これは、合意形成の場の設定という課題につながることになる」(同上)。
- (29) 同上、p.51.
- (30) 同上、pp.51-52. また、受苦圏の最小化という戦略は、事前の対策だけでなく、現時点で発生している事柄に事後的に対応することもあり得るという(同上、p.52.)。
- (31) 同上 ここで梶田が用いている「欲求」という概念は、本稿で主に使用している「欲望」と同じ意味と理解して差し支えないだろう。
- (32) 同上
- (33) 同上、p.53.
- (34) 同上、p.55.
- (35) 同上、p.53.
- (36) 鬼頭(1996)、p.81. 例えば、加藤尚武は「地球全体主義」を提唱し、その論点を次のように書いている。「欲望の世界の総量を制限しなければならない。世界の総量を制限すれば、必ず個人の自由も制限されるのだろうか。総量規制と自由主義は絶対に両立できないのだろうか」(加藤、p.47.)。
- (37) 鬼頭(1996)、pp.81-82.
- (38) 鬼頭(2000a)、p.61.
- (39) 同上、p.64.
- (40) 鬼頭(1996)、pp.126-127.
- (41) 同上、p.128.
- (42) 鬼頭(2000a)、p.64.
- (43) 鬼頭(1996)、pp.139-140.
- (44) 鬼頭(2000a)、p.67.
- (45) 同上、p.68.
- (46) 同上
- (47) 同上、p.69. そのような意思決定は、当事者たち相互の「学び」という過程を含む、動的な参加によるものであるという(同上)。
- (48) 鬼頭(2000b)、p.5.
- (49) 同上

(50) Giddens, p.64. (邦訳 p.85.)

(51) 村上 (1994)、pp.235-246. 同時に、文明の普遍化の影響が及ぶ地域の内実も、多様である。「ブル・ドーザ効果に対抗し、個別の文化の独自性とアイデンティティを主張するはずの文化の側でなお、文明のブル・ドーザ的波及力を歓迎し、それを受容して、文明のなかに取り込まれようとする強い傾向が存在している。言い換えれば、多元主義にあるはずの文化の側でも自己分裂が起こっているのである」(同上、p.237.)。鬼頭が批判する静的な多元主義は、こうした点を見落とし、当該の文化が近代化を遂げようとすることを否定しがちである。

(52) 梶田、p.vi.

(53) 村上 (1998)、p.60.

(54) 同上

(55) 同上、p.61. 鬼頭も、梶田と同様に、大量生産・消費・廃棄の経済社会システムの変革の必要性を説いていた。その実践について、次のように述べている。「人間中心主義が退けられなければならないとしても、それは、このシステムに内在する根源的な人間の姿勢に対する反省でなければならないだろう」(鬼頭 2000b、p.5.)。このような認識へと至るには、どのような過程が必要となるのかということをも、問わなければならない。その時、注1で触れた、精神分析的な意味での「欲望」の問題が現れる。それは、認識主体としてのそれぞれの人間が、自身の生きる生活環境との関連において、どのように現状のパースペクティブを形成したのか、そして、それはどのような条件下で変容し得るのかといった問いをめぐるものである。

(56) 梶田、p.169.

## 参考文献

梶田孝道『テクノクラシーと社会運動 対抗的相補性の社会学』東京大学出版会、1988年。

加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、1991年。

鬼頭秀一『自然保護を問なおす——環境倫理とネットワーク』ちくま新書、1996年。

\_\_\_\_\_「環境倫理における『地域』の問題を巡って——多元性と普遍性の狭間の中で——」、『東北哲学会年報』第16号、2000年a。

\_\_\_\_\_「歴史に『存在の豊かさ』を問う 経済社会システムの再構築」、『ATT研究情報』第20号、2000年b。

村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、1976年。

\_\_\_\_\_『文明のなかの科学』青土社、1994年。

\_\_\_\_\_『安全学』青土社、1998年。

\_\_\_\_\_『文化としての科学/技術』岩波書店、2001年。

Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Polity, 1990. (松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結——』而立書房、1993年。)

## Control of Desire and Universality / Plurality

### <Summary>

Yuki Hagiwara

A serious accident of the nuclear power plant occurred in Fukushima. People in the metropolitan area were in a panic because they feared the shortage of food, water and electric power. On trying to save electricity, some emphasized the importance to increase a supply of electric power; others proposed to reflect on our daily life. A keyword of the latter is human desire.

The Enlightenment tried to liberate people from Christianity in Modern Europe. Yoichiro Murakami calls this process secularization revolution. The idea of modern civilization is to control nature artificially and set people free from the traditions. They were approved of pursuing their desire. The development of technology encouraged this tendency. Their society based on mass-production system enabled them to waste resources to achieve convenient and comfortable life. The advancement of information technology also dug up their potential desire. People were urged to want what they had never done. In this way they became pursuing whatever they want.

The air and water in Japan were polluted all around the country through the process of economic growth in the latter half of the 20<sup>th</sup> century. Takamichi Kajita analyzed the antagonism between the beneficiary sphere and the costly sphere. People in the costly sphere, where dangerous facilities such as nuclear power plants are built, fall a sacrifice to the convenient and comfortable life in the metropolitan area as the beneficiary sphere. Moreover, people in the

beneficiary sphere are not aware of the sacrifice of the costly sphere. The change of social systems and the advancement of technology will improve the condition. However, as Kajita says, the root of this problem is human desire. Controlling desire is necessary to change the situation radically.

Shuichi Kito approaches the problems of desire from the view of environmental ethics. He proposed social linkages theory. Generally speaking, socio-economic linkages and cultural-spiritual linkages are closely related in pre-modern society. The constellation of these linkages changes through the process of modernization. Daily life in modern society is based on mass-production system, but on the other hand, people often argue the importance of environmental sustainability. This means their lifestyle and their thought are not necessarily linked to each other. People cannot tackle the problems of desire if they ignore such a situation. The task is to consider how they can reconstruct the relationship between two linkages.

According to Murakami, it is necessary to become fully aware that contemporary issues are the products of human desire in modern civilization. If people try to achieve this difficult aim, they need a chance to think self-critically through the process of decision-making. Kito says that social linkages theory works as a frame of reference. It will give people an opportunity to change their perspectives as a result of self-critical thinking. This is the reason why Kajita exaggerates researchers should participate in the decision-making process. While they make much of plurality of each area, they try to shaken the truism of people with a frame of reference which does not show one unique solution.